

招聘報告書 Babak RAHIMI 博士（カリフォルニア大学サンディエゴ校文学部）

2015年10月10日～21日、明治大学交際交流基金事業のアポイントメント・プログラムとしてカリフォルニア大学サンディエゴ校からバーバク・ラヒーミー准教授を招聘した。氏は、前近代から現代までのイスラーム・シーア派や現代イラン社会に深い学識を有する研究者である。

10月13日第2時限には駿河台キャンパスで、10月15日第5時限には中野キャンパスで、シーア派イスラーム教徒の信条や生活について講義があった。

まずは、ナジャフという宗教都市(イラク領)に、スィースターニー師（最高位のイスラーム法学者の一人で、政治的影響力も大きいと考えられている）にインタビューに行った旅程の写真を示して、イラン、イラクの(戦争も含む)近代史の基本的なイメージと知識を与えるところから講義を始めた。ナジャフは、シーア派イスラームにおいて大きな役割を果たしているイスラーム法学者のなかでも、アーヤトッラーとよばれる高位のイスラーム法学者が住み後進を育てている4つの宗教都市の一つである。イランの憲法においては、イスラーム法学者が最高指導者となって統治に関わることが規定されているが、スィースターニー師は、イラクで同様の政治体制が確立することに必ずしも積極的でない、との見解を婉曲に表明している。スィースターニー師と会見した際に、平信徒は師の手には接吻をすることになっていることを知らず、握手のためだと思って師の手を握って左右に振ってしまい不興を買った、などの失敗談なども披露してくれた。

そこから、シーア派の由来、シーア派特有の哀悼行事がグローバルに展開している様子など、シーア派についての基礎的な事項の説明があった。

他方で、すべてのイスラーム教徒が宗教中心の生活をしてはいないことをイラン系アメリカ人の写真などで示し、現代のイランの若者の文化や、宗教生活にもデジタル機器が利用されていること、などもビジュアルに示し、現代におけるイスラームの異なる位相にも言及した。

さらに ISIL にもふれて、「急進主義 radicalism」は必ずしも宗教的なものとはいえない、とはいえ、宗教が常に中立というわけにもゆかない、など、宗教と国際政治に関わる示唆に富む視座も提供してくれた。

受講者にも、実際にイラン出身者が話を聞く貴重な機会だった、英語であっても内容はわかりやすかった、など好評であった。

(文責: 山岸智子)